

広島流川教会の思い出とその秘話

浜 恵 介

私は大学時代の恩師の影響でキリスト教に触れ、広島に帰郷後の二五歳のときに広島流川教会で洗礼を受けた。洗礼を受けて間もなく、教会の伝道師（牧師を補佐する教職）が不在となり、私がピンチヒッターとして、二年の間、平日は仕事をしながら、教会事務の奉仕をさせていただいた。流川教会に対する世間のイメージは、谷本清牧師と原爆孤児精神養子運動、原爆乙女の渡米治療が真っ先に思い浮かぶであろう。私が流川教会に関わったのは、谷本牧師が召天された後しばらく経ってからである。このエッセイでは、世間では余り知られていない流川教会での出来事や、私の思い出について、書いていきたい。

【流川教会略史】

広島流川教会は、歴史的にはプロテスタント・メソヂスト派の流れを組んでいる。南北戦争のために日本への伝道進出が遅れた関西学院系の米国・南部メソヂスト派の「瀬戸内伝道圏」により、流川教会は神戸栄光教会に次ぐ、第二の拠点として一八八七年に創設された。当時の鉄道は東京から神戸までしか開通しておらず、

神戸以西の交通はもっぱら船によるものであった。そこで、神戸と広島を拠点にして瀬戸内海を海路で包み込む伝道構想が立てられ、瀬戸内地方各地に教会が建設された。流川教会には女学校も併設されており、これが後の広島女学院の前身となる。いわば流川教会と女学院は、ルーツを同じくする姉妹関係にある。

谷本清牧師は、関西学院を首席で卒業後、米国のモリ―大学に留学され、沖繩を経て流川教会に着任された。原爆投下後の谷本牧師は、留学中のネットワークを活かして、米国で被爆体験を訴えて被爆者救援運動に尽力し、米国では上院の開会祈祷をするほどの時の人となった。谷本牧師時代には、広瀬ハマ子・広島女学院院長や、広島工業大学の創設者・鶴虎太郎さんが教会に在籍され、運営をリードされている。またこの頃の教会学校（日曜学校）は日本で最大規模を誇っていたという。

【谷本清牧師の後任の森澤一由牧師——リタージュカルな礼拝と「音楽」の教会】

一九八二年に谷本清牧師は牧師を引退され、後任は直弟子であ

る森澤一由牧師に引き継がれた。私が流川教会と関わったのは森澤牧師時代である。被爆五〇年の際には、流川教会礼拝堂に「被爆十字架」が掲げられた。「被爆十字架」は教会堂の尖塔にあつたものと一部では誤解されているが、正確には原爆投下後に教会堂の焼け爛れた廃材で十字架を制作したものである。また、森澤牧師時代にも、米国から教会あてに時おり献金が来ていた。

被爆五〇年の際に礼拝形式も改められ、週ごとに第一週は日本基督教団信仰告白、第二週は使徒信条、第三週は十戒交読、第四週は交読詩編を基調としたリタージカル（音楽や儀礼を重視した礼拝）なものとなった。森澤牧師も米国での留学経験があり、米国のメガチャーチの礼拝を意識したものと思われる。教会礼拝に詳しい水野隆一・関西学院大学神学部教授いわく、日本におけるリタージカルな礼拝で特筆される教会の一つに、流川教会が挙げられるという。被爆六〇周年の際には、水野教授の監修で記念礼拝が持たれたが、その荘厳たる美しさは、私は今も忘れることが出来ない。

また流川教会ではパイオルガンが導入されており、エリザベト音楽大学（カトリック）に在籍するプロテスタントの信徒の方が、最寄りになる流川教会に來られている。リタージカルな礼拝と、一流のオルガン奏者によつて毎回の礼拝が執り行われ、流川教会は「平和」の教会であると同時に「音楽」の教会になっていた。私が教会事務の奉仕をしていた頃は、信徒に民秋史也さん（モルテン社長）が在籍されておられたり、お連れ合い様の関係で松江澄さん（広島県議で平和運動家）の葬儀も行われた記憶がある。また古い教会員名簿を整理していたところ、医師の日野原重明さんのお名前があつて、非常に驚いた。実は日野原さんの御尊父の日野原善輔さ

んは、戦前に広島女学院の院長を務められており、日野原さんも戦前に流川教会に在籍されていたようである。

【私の研究生活と流川教会】

私は洗礼を受ける前の大学生時代から、反核平和運動史に興味を持つていた。しかし、流川教会で洗礼を受けたのは、それとは違ふ文脈であつた。私が流川教会に惹かれた理由は、年齢の近い伝道師さんと、敬虔な幼稚園の先生が信仰生活の導き手としておられたこと、生まれて初めて耳にするパイオルガンの美しい音色と力強い牧師の説教が圧倒されたからである。期せずして、私の研究と信仰生活が結びつくこととなった。

いつか「流川教会史」の研究をしたいと願っていたが、私がぼんやりと過ごしているうちに、川口悠子先生（法政大学准教授で広島大学の「越境」で谷本清牧師を研究）に先を越されてしまった。もつとも川口先生の博士論文を読んで、私には被爆体験の「越境」という理論は到底構築出来ないと思つた。同時に、歴史研究というものは当事者（教会員）がするものではないと改めて実感した。

私は二〇二一年に、大阪大学大学院文学研究科博士課程後期に、社会人しながら入学する機会を与えられた。二〇年ぶりに広島を離れて、研究に理解のある団体に職を転じ、アカデミズムの世界に戻つたが、研究の世界へと導いて下さつたお一人が、川口先生であつた。このように流川教会と私の歴史研究は不思議と繋がり、神さまの導きを感じないではられない。原爆文学研究会が、今後も第二期としてリニューアルされ、私の広島でのクリスチャンとしての知見がいささかでも共有できる機会が与えられれば幸いに思っている。